

■寺西 肇 (音楽ジャーナリスト)

聞き辛いからといって、安易にオーディオのヴォリュームを上げてはいけません。耳を研ぎ澄ませ、注意深く音楽に集中してみたい。すると、浮かび上がってくる。作曲家が書いた音のひとつひとつ、奏者の息遣い、鍵盤を叩いて起こるアクションの雑音、そして、次の音を期待する私たち自身の気持ちが……。もしかすると、あなたの音楽の聴き方自体を変える出会いになるかもしれない。

〈ゴルトベルク変奏曲〉は、じつに不思議な作品だ。「これが一番」と言い切れる演奏や録音がない。これは「良い演奏に出会えない」という意味ではない。むしろ、魅力的な演奏が次々に現れてきて迷った挙句に、結局のところ「どれもいい」などと匙を投げてしまう。しかし、世の中の聴衆のほとんどがそうなのだろう。そして、演奏家もきつとそうなのだ。だから、途切れることなく〈ゴルトベルク〉のディスクが生み出され続ける。

「ごく最近だけを思い返しても、ライヴツイピでのライヴを聴いて心酔し、心待ちにしていたシユタイアーのディスクは

期待に違わず素晴らしい。同時期に出たタークセンの録音からも、学ぶことは多かった。また、少し前には、大きなオルガンを使った録音も出て、それなりに面白く聴いた。モクン・ピアノによる録音でも、はっとすることはたびたび。特に、オーセンティシティとは遙かにかけ離れた、しかし煌めきに満ちたゴールドのディスクには今も手が伸びてしまふ。そんな中で、今回の一枚である。パツハ時代の初版譜(1741年)の表紙には「Vors Clavierhal mit 2 Manulien」と明記されており、実際に楽譜の上で2段鍵盤での演奏を要求される場面がある作品を、あえてクラヴィコードを用いたことについては、やはり「当時は一般的な楽器であり、パツハは自宅で〈ゴルトベルク〉も弾いてみたはず」と言う以上の明確な根拠はない。しかし、楽器の機能の面で表現力不足を感じるかと言えば、答えは「ノー」である。冒頭に記した通り、むしろ色彩豊かな様々な要素が「聴こえて」くる。

パリでアンタイラに字んだというシユティーンズ。演奏自体は地に足のついたもので、テンポ取りにも迷いが無い。ワイブライトが使えるクラヴィコードの録音では、それを誇示するような「あざとい」演奏も散見するが、彼の場合はまったく無い。ただ、例えば付点リズムが印象的な第7変奏で、リピート部分でアクセントをつけたがために、8分音符の連続として演奏するよ様な安易な処理は、議論が分かれるだろう。しかし、いずれにせよ気に入った〈ゴルトベルク〉のディスクが一枚増えたことだけは間違いない。

Bach, J.S.

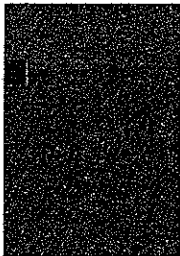


J.S.バッハ:ゴルトベルク変奏曲

ベンヤミン=ヨーゼフ・シユティーンズ(クラヴィコード)
録音:2009年2月
[EPR-Classic©2010EP RC007]



Beethoven



ベートーヴェン:交響曲第5番(運命)
(ドキュメンタリー「ベートーヴェンの第5交響曲〜再発見」付)

ジョス・ヴァン・インマゼール指揮アエマ・エテルナ
録音:2009年9月(L)
[EPR-Classic©EPRC 008] DVD



■佐伯茂樹 (音楽ライター)

一昨年、最先端のベートーヴェン研究の成果を反映した交響曲全集をリリースして話題になったインマゼールと手兵アエマ・エテルナによる第5交響曲のライヴ映像。ロブコウィツ伯爵におけるライヴウェイト・コンサートを再現しようとしたとすることで、蠟燭の照明など雰囲気のある映像を楽しむことができる。CD全集でも実行していた試みが、実際に視覚的に確認できる点は興味深く、特に、トランペットが、指孔による修正をせずに片手で構えて演奏しているさまは衝撃的だ(ちなみに、指孔による修正は1950年代以来おこなわれてきた。CD全集では指孔有りと無しとの両方を使用したようである)。ポリーナス・トラックでも、奏者自身が自撮りに(?)アモンストレーションしながら解説しているが、その手前には、この時代にはまだ存在しなかったハンドル式のティンパニが映っているのは愛嬌。演奏は、従来の精神的な第5とは対極に位置するもの。付属のドキュメンタリーも面白い。